

阿弥陀仏四十八願

無量寿経親聞記第六章摘録

# 第六の大誓願



## 第六の大誓願

法蔵白言。唯願世尊。大慈聽察。我若証得無上菩提。成正覺已。所居仏刹。具足無量不可思議。功德莊嚴。無有地獄。餓鬼。禽獸。蝸飛蠕動之類。所有一切衆生。以及焰摩羅界。三惡道中。來生我刹。受我法化。悉成阿耨多羅三藐三菩提。不復更墮惡趣。得是願。乃作仏。不得是願。不取無上正覺。(一、国無惡道願。二、不墮惡趣願。)

これは、浄土宗で最も著名な四十八願です。夏老居士が当時、この一章を集めた時、三ヶ月もの月日を費やしました。更に、慧明法師と梅光義居士の二人の助けにより整理されました。五種類の原訳本と合わせてみると、確かに素晴らしく集められており、文字の整理としては、完璧と言

うことができません。五種類の原訳本において、四十八条は二種類あり、二十四条も二種類あり、三十六条は一種類となっています。よって、古徳は、サンスクリット語の原本は一種類では無く、お釈迦さまが在世で説法した時、何度も無量寿経を説いており、この經典の重要性を見てとることができる、と言いました。そこで、夏老居士が集めた時、二十四を大綱とし、四十八を細目としました。五種類の原訳文の本来の面目を全て保存でき、極めて貴重です。

法蔵菩薩は、仏及び当時の諸大弟子に修学の報告を提出しました。法蔵菩薩の態度は非常に謙虚で、言語にも敬意を表していました。法蔵菩薩は言いました。

「私が無上菩提を得、正覚したら、私の居住する仏土において、必ず無限の不可思議な功德莊嚴を具える。」この言葉こそが、法蔵菩薩の全ての願いの総説です。この經典は、お釈迦さまが我々のために極樂世界の状

況を紹介したもので、全經典が四十八願の展開した詳細な説明となっており、全ての句が四十八願と相違なく、思想見解、行法作法、衆生教化が完全に互いを補完し合い、仏仏道同と言うことができます。

法蔵菩薩が居られる仏土こそが彼の道場であり、彼は既に円満な仏果を成就しているため、自身の道場は完全に、仏になりたいと願い、衆生救済を願う人々を助けるためのものです。

その道場は一切の諸仏国土の功德莊嚴を超えております。お釈迦さまは經典において、極樂世界は他世界を超越するところは、第一に、帶業往生し、第二に往生不退であり、第三に往生後、一生成仏し、これが極樂世界の最も殊勝しているところである、と説いています。

十方世界には全て階級があり、極樂世界のみが平等です。極樂世界に往生する方法はとても簡単です。一心に名を呼び、念仏を唱えればよいのです。極樂世界に悪道は無く、阿弥陀仏は三悪道で人々は苦しんでおり、且

つこれこそが修道の障壁だと感じます。十方諸仏土は、仏と衆生の善悪の業によるもので、且つ極樂世界は阿弥陀仏の願力であり、よつて清らかで莊嚴です。極樂世界に行く者を阿弥陀仏は全く問いません。充分な信、願、行があればよいのです。この世界の一切の苦が、極樂世界には全く存在しないのです。我々凡夫たちは業を消せなくても帶業往生することができ、帯業であるものの、極樂世界に行けば、悪縁は無くなり、よつて作用も起きません。作つたのは悪業だと考えてはなりません。一度考えると、ただ業を増長するばかりで、途絶えません。過去にあつた全ての悪業はすでに過ぎ去つたので、再び思い出す必要はありません。心を集中し、阿弥陀仏だけを思うことこそがいわゆる業障を消すことができ、善の中の善であり、念仏が最良の消業障の方法です。全ての時に、如何なる場所でも、心で念ずることは全て阿弥陀仏であるのなら、罪業は無くなりません。

「衆生」は「衆縁和合から生じる」ものであり、仏以外の九法界が全て衆生です。「焰摩羅界」とは「地獄」を指します。特に三悪道で罪の深く重い衆生を指し、念仏さえ唱えれば往生でき、且つもう三悪道に墮落することはありません。この「三悪道」が文字において述べているのは三塗であり、且つ実際、声聞縁覚権教菩薩さえも含まれており、極楽世界に生まれた場合、全て大菩薩に属し、もう引き返すことはありません。法蔵はまた、こうおっしゃっています。「得是願，乃作仏，不得是願，不取無上正覚。」『阿弥陀経』には、阿弥陀仏はすでに成仏して以来十劫が経っていると言っており、満願であることが証明できると言います。言い換えると、この四十八願は事実なのです。

我作仏時。十方世界。所有衆生。令生我刹。皆具紫磨真金色身。三十二種。大丈夫相。端正淨潔。悉同一類。若形貌差別。有好醜

者。不取正覺。(三、身悉金色願。四、三十二相願。五、無差別願。)

衆生にも等覺菩薩がおり、十方世界にも小乗仏法を修める者、人天、畜生、餓鬼がいます。阿弥陀仏は金色の身であり、往生した者と阿弥陀仏の外観は同一で、三十二種の大丈夫の相を具備しています。全ての世界において、衆生の果報は全く異なるため、多くの煩惱を生み出しています。果報が良いものは傲慢になりやすく、悪いものは自卑感をもち、心理的に不安定で紛争がもたらされます。

我作仏時。所有衆生。生我国者。自知無量劫時宿命。所作善惡。皆能洞視。徹聽。知十方去來現在之事。不得是願。不取正覺。(六、宿命通願。七、天眼通願。八、天耳通願。)

全ての世界の衆生は相当の程度を修めなければ、宿命天眼天耳などの神通の境界に到達できません。有する者は修得したため備えており、有し



ない者はその妄想、執着のために喪失したのです。清浄心の作用こそが神通であり、神通には大小があり、清浄心の程度により差があります。極楽世界に行けば、阿弥陀仏の威神加持により、自然と各種神通を得ることができます。真の念仏は一心に雑念無く、一句仏号で、阿弥陀仏の功德が自己の功德となります。心は阿弥陀仏の心となり、願いは阿弥陀仏の願いとなり、行動は阿弥陀仏の行動となれば、神通能力が阿弥陀仏と異なるでしようか。阿羅漢の宿命通は過去五百世だけを知ることができます。極楽世界に生まれたなら、過去の家族が何道に生きているのか、はつきりわかり、彼らを救度するのは非常に簡単なことです。「洞視」は天眼通であり、「徹聴」は言われていることが全て聞こえる、天耳通という能力です。仏は無縁の人を救済することはできません。縁があれば、全て救度することができます。この念仏法門を衆生に教えてあげ、機縁が来たら、即済度されます。「十方」は空間を、「過現未」は時間を指します。時空は

無制限であつても、仏は大小全てのことを知ることができます。清浄心は鏡のように、全てを照らし、知らないことはありません。下下品往生の者にもこの能力があります。その他經典では、八地菩薩以上の者がようやくこのような不思議な能力に達するが、この法を信じると、一生の煩惱、憂い、心配が全て解き放たれ、三年、五年と念じれば、必ず成果があります。極樂世界に生まれれば、高い品位を得ることも可能です。

我作仏時。所有衆生。生我国者。皆得他心智通。若不悉知億那由他百千仏刹。衆生心念者。不取正覺。(九、他心通願。)

十方世界の衆生は無量無辺で、我々は心の中で何かを念じるとしたら、極樂世界の人々は全てわかっています。我々の心が動けば、彼らはそれが見えます。我々の言葉も、彼らには聞こえます。極樂世界に行きたいと思つたら、彼らはそれを知ります。あなたの言動がもし一致していないな

らば、彼らはこれをも知り得ます。よつて、決して自らを騙してはなりません。仏、菩薩は我々の目の前に存在し、我々の一挙一動を全て知っています。常にこのことを念頭に置けば、我々の淨業はすぐに成就します。

我作仏時。所有衆生。生我國者。皆得神通自在。波羅密多。於一念頃。不能超過億那由他百千仏刹周徧巡歷。供養諸仏者。不取正覺。

(十、神足通願。十一、徧供諸仏願。)

「神足」は、神奇で常識を超越することが「神」と言い、「足」は円満であることを表します。前述の神通以外に、残りは全てこの一条に包括されます。通常、変幻自由自在のこともがこれに属します。この能力があれば、衆生の憶念と共に人を助けることができます。普門品の随類化身のように。「徧供諸仏」を現代の言葉に換えると、即ち時空を超越し、一念の間に十方世界へ行つて衆生を濟度することができ、縁がある人を引き入れ

ます。十方度化衆生では化身として行くので、自身はまだ講堂で講義を聴いています。菩薩度生には応身、化身が存在し、化身はたいへん多いのです。周邦道老居士は抗戦前に南京に赴いており、その住居は旧式五進の院子でした。ある日、出家者が院の中で周夫人に化縁を行いました。五斤の胡麻油だけお願いしましたが、当時、周夫人はまだ仏を信じておらず、供養しませんでした。その後、考えてみると、門も開いておらず、この出家者がどのように入ってきたのか非常に不可解でした。それから台湾で李老師にこの事を話しました。李老師は、この出家者は恐らく地藏菩薩の化身であり、あなた方を救うためにやってきたのだ、と言いました。周居士はこれを聞いてとても後悔しました。

極楽世界では誰もが化身の能力を有しており、時空を超え、過去、未来を知ることができません。この種の能力は、我々も誰でも持っています。心が迷っているため、發揮することはできません。極楽世界の良いと

ころは非常に多くあります。極樂世界に修行に行かず、自己の力だけでは、この種の効果に達するために多くの時間がかかり、一進一退でどれだけの挫折があるか測りしれません。よつて、一切の諸仏が我々に極樂世界への往生を薦めていることには道理があります。

我作仏時。所有衆生。生我國者。遠離分別。諸根寂靜。若不決定成等正覺。証大涅槃者。不取正覺。(十二、定成正覺願。)

この願いは、阿弥陀仏から我々への授証に等しく、また、即ち阿弥陀仏から我々への成仏保証書に等しいものです。極樂世界に生まれた人は皆、妄想や執着など無く、六根が清浄で、汚れが全くありません。これは弥陀本願の功德威神加持がなければ、非常に難しいことです。極樂世界に生まれれば、阿弥陀仏が、我々もこのレベルに達することを保証します。このレベルから更に上昇し、最後は必ず成仏して大涅槃を証すること

ができます。 「涅槃」には多くの意味が含まれます。その中で最も重要な意味が「不生不滅」です。これは如来という果地の境界です。小乗法の「涅槃」は「滅」とされており、煩惱を滅し、生死を滅します。言い換えると、つまりは不生不滅という意味です。これは、我々の修学における究極の最終目標は、諸仏と同じく円満に無上菩提を証得することだと説明しています。真の保証が得られれば、必ず一生の中で成就できます。全ての経典の中でこのような説法は他にはありません。真の悟りを得、できるだけ早く成就したい人はこの願いを讀んだら、極楽世界への往生を望まないのがある得ないでしょう。

我作仏時。光明無量。普照十方。絶勝諸仏。勝于日月之明。千萬億倍。若有衆生。見我光明。照觸其身。莫不安樂。慈心作善。來生我國。若不爾者。不取正覺。（十三、光明無量願。十四、觸光安樂願。）

仏仏道同、仏の果証と清淨心も同様です。仏の光が照らす範囲が異なるのは、その因地（成仏前の修行の段階）で発される願いが異なるからです。法蔵が発心すれば、その願いは一般人を超越し、且つ一切の諸仏をも越えています。このため、その光明は自然と十方を照らし、一切の諸仏光明はこれと比較することはできません。お釈迦さまは、「光中極尊、仏中之王」と称賛されました。日光は明るいものの、障礙があれば、室内を照らすことはできません。仏光には障礙がありません。ある人が言いました。なぜ、私を照らさないのですか、と。これは、その人自身に障礙があり、妄想や執着を自覚していないためです。もし、心が清らかになるまで念仏を唱えたら、仏の光の中で沐浴しているかのように感じるでしょう。もう一つ、わかりやすい例を挙げましょう。經典が置かれているところで、念仏や読経や修定の時、仏の光を感じやすく、快樂を得、悪念を止め、慈悲の心が増すとされています。極樂世界への往生を求める念が

徐々に強まり、これが古徳の言う浄土です。

我作仏時。寿命無量。國中聲聞天人無數。寿命亦皆無量。假令三千大千世界衆生。悉成緣覺。於百千劫。悉共計校。若能知其量數者。不取正覺。(十五、寿命無量願。十六、聲聞無數願。)

阿弥陀仏の寿命は無量で、念仏して極楽世界へ往生した人も寿命が無量であり、古徳は、これが浄土の最も優れたところである、と言っています。寿命が長く、何でも円満となります。例えば、三千大千世界の全ての衆生が、縁覚を証することができたとします。縁覚は辟支仏で、地位と神通は羅漢よりも高く、百千劫の歳月をかけても、極楽世界の人数を計算しても計算しきれません。これらの人々は十劫において無量無辺の世界から極楽世界に移民したものです。阿弥陀仏の世界の号称は極楽であり、その根本は「無量寿」です。



我作仏時。十方世界無量刹中。無數諸仏。若不共稱嘆我名。說我功德。国土之善者。不取正覺。(十七、諸仏稱嘆願。)

この願いと我々の関係はもつとも大きいです。極楽世界はいくら素晴らしくても、誰も紹介してくれなければ、我々も知りません。我々は往生の条件を備えていても、この法門に出会わなければ、無益です。

十方の一切の諸仏は衆生に向けて説法するにあたって、講じた經典の中で、この經典を必ず述べております。なぜならば、この經典は全ての根性に合致します。仏は何故、出世したのでしょうか。それは衆生がただちに成仏できるよう助けるためです。そのため、仏が衆生に説いた一切の理論・法門は、成仏法門が第一であり、且つ成仏法門は無量寿經、阿彌陀經、觀無量寿仏經の三部經です。この法門を信じられない、受け入れられないなら、仏は他の法門を説きません。ある人は、極楽世界へ行かずこの世

界に留まり、来世に裕福になりたいと希望します。仏は人天福報を修める方法を教え、その願望を満たします。

この法門はどんな人であれ、善悪、身分、男女、年齢、位を問わず、ただ信じ、願ひ、この方法に従ひ一心に念仏を唱えれば、往生することができます。これは普度衆生ができ、円満に成仏できる法門であり、非常に稀なものです。

よつて、一切の諸仏が世間に出現する目的は、皆を成仏させることであり、この成仏法門を説かない理由がありません。恐らくこの法を親友や家族に紹介しても首を振られ、悲しい思いをしたことがあるのではないでしょう。か。悲しむ必要はありません。彼らは成仏の機縁がまだ来ていないため、受け入れられないのです。この法門を受け入れるには、善根、福德、因縁を同時に具備してなければなりません。我々は計り知れないほど生まれ変わり修行をしています。この三つの条件がなかなか備えられない

いため、百千万劫が経つても、この法門に遭遇できません。今日、遭遇できたらなら、その因縁を大切にしなければなりません。

我作仏時。十方衆生。聞我名号。至心信樂。所有善根。心心回向。願生我国。乃至十念。若不生者。不取正覺。唯除五逆。誹謗正法。

(十八、十念必生願。)

第十八の願いは、四十八願の中で最も重要な願いです。古来祖師達が公認しており、「十念必生」が重要で、名号功德の不可思議を明白に宣布しています。全ての經典を比較して検討したら、得られた結論は最終的に「阿弥陀仏」の聖号の一句です。また研究に戻ると、四十八願はこの一句の仏号の解釈であり、無量寿経全経は即ちこの四十八願の解釈であり、大方廣仏華嚴経は即ち無量寿経の解釈であり、大蔵経は即ち華嚴経の解釈です。これにより、大蔵経を濃縮した一句仏号を体得することができ

ます。華嚴経では、「一即一切。一切即一」と言っています。一般人にとって「任一」、そして成仏機縁に成熟した人にとっては「専一」で、専は一句仏号を指します。このことを理解すれば、必ず変えること無く、必死に一句仏号を唱え続け、緩むことはありません。

真の仏号は四文字の「阿弥陀仏」のみです。「南無」は「帰依」という意味です。蓮池大師がこの世にいた時、他人に念仏を教える方法とは、ある人に聞かれました。蓮池大師は「南無阿弥陀仏」と唱えるよう教えま  
す、と言いました。更に、「ご自身は」と聞かれました。蓮池大師は、私  
自身は「阿弥陀仏」と念じます、と言いました。この生涯で浄土を求める  
ことを決心し、本当に信じ、本当に望むなら、この四字名号を執持すれ  
ばよい、恭敬の言葉はもう必要ありません。一般の方が往生を望まなく  
ても、「南無」という礼節の言葉を加え、阿弥陀仏と善縁を結べば、将  
来、往生したい時に、この種が成熟します。「至心」とは、真の心であ

り、一寸の迷いも無く、完全に仏の教訓を聴き、心からこの法門と極樂世界を愛する心です。念仏は凡夫にとつて、多ければ多いほどよいのです。念仏を唱えなければ、必ず妄想の念を生じ、全ては自分が正しいとなり、貪瞋痴慢が全てやってきます。よつて念仏を唱えなければ六道輪廻となります。

阿弥陀仏を唱え、自分のはつきり聞こえるようにきちんと唱えれば、妄想も無明も無くなります。一句仏号は、妄想を打破するのみならず、無明を断ち、その作用は不可思議です。一句仏号を唱えれば、極樂世界にいる人は低品位で往生した人であっても、はつきりと聴くことができ、極樂世界の人々は皆喜び、じきに成仏することを知ります。それだけで無く、十方世界の諸仏も護念してくださるのです。護法神が念仏人を守らないことがあるでしょうか。念仏を唱えても悪魔に出会う人もいますが、これは心がまだ定まらず、ためらいがあり、念仏しても他のことを考えていたた

め、仏菩薩と感応道交できず、悪魔がそれを察知し、翻弄したのです。堅く極楽世界を求め、心があれば、悪魔は邪魔できず、自然に遠くに離れます、かえって、あなたに尊重の心をもつでしょう。この乱世は惨めで、災難だらけで、予想不可能です。状況をはっきりと認識してください。この方法以外に、我々を救う方法はありません。かつこの方法は確実に有効であり、安全且つ迅速です。四六時中念仏を唱えることは、信じられないほどの善根であり、仏恩を報うため、機会があれば、必ずこの法門を周りの人に推薦しましょう。

だからこそ、我々は毎月经典を印刷し、配っているのです。一句仏号を唱えば、金剛の種が植え付けられるのです。全ての善事は厳粛な浄土に戻ります。命の最後の時、十念、一念どちらも往生できます。しかし、多くの患者が臨終時、昏迷しており、家族さえも認識できないのに、どうしたら念仏を唱えられるでしょうか。臨終時に力が欲しければ、平時、真面

目に取り組み、運に頼ってはなりません。且つ以下の三つの条件が不可欠です。第一に、臨終時、正気で迷いがあつてはなりません。善の知識に到達していれば、三悪道に落ちることはありません。つまりよく死にたければ、よく生きることです。第二に臨終時に善の知識を思い起こし、すぐに念仏を唱えてください。第三に、聴いたらすぐに覚悟を受け入れてください。この三つの条件が揃っている人は、何千人の中でも稀なものです。だからこそ、平時から備えることで、臨終時、掴み取ることができません。毎日寝る時、今日は往生するのだと念じるのです。毎日思いつづければ、ある日、本当に仏が導いてくださいます。歡喜に溢れ、恐怖などありません。黄念祖老居士は往生の2ヶ月前、全身全力で念仏を唱えました。一日十六万仏号を唱えました。これが模範です。国外では、生活で制限を受け、朝、晩の日課は継続しなければならず、時間が足りない場合、十念法だけで構いません。できる限り一息で念仏を唱え、一念はどんな声で

もいいので連続十回念じます。時間はかからず、朝晩二回、これが最も簡単な朝晩の日課です。一生の中で一度も欠かさなければ、經典で言われる「一向専念」に合致します。これが固定日課で、散課は随時、念仏を唱えます。臨終十念はただ十回仏号を唱えるものです。「唯除五逆、誹謗正法」。五逆を犯しても正法を誹謗しなければ往生できます。觀經でも「正法を誹謗する」者は念仏法門を全く信じておらず、受け入れられないため、当然、往生できないとされています。蕩益大師は、往生できるか否かは信願の有無により、品位の高さは念仏の工夫の深さによる、と語っています。工夫が浅いのは、「工夫成片」です。「成片」は心の仏号成片で、仏号以外に念頭がありません。貪（むさぼり）、瞋（怒り）、痴（愚か）、慢（傲慢）、是非（是と非）、人我（他人と自分）の心はあるものの、作動しておらず、帶業往生で凡聖同居土に生まれます。例えば煩惱を断つ「事一心不乱」は、方便有余土に生まれます。更に深いのは、一



品無明を打破し、一分法身を証すると、円教初住以上の菩薩境界、いわゆる「理一心不乱」となり、実報莊嚴土に生まれ、更に上に行くとい仏的境界の常寂光土となります。

日常生活を淡く見、且つ責任を負わなければなりません。そうでなければ、仏法のイメージが破壊されます。責任を負わなければ、社会の人々が、「仏を学んだ人は、家もいらない、両親や子供も養わず、仁義もない。」と言い、仏法は破壊されるでしょう。世間において我々は仏を学ばない人よりも円満でいなければなりません。「放下」は、心に心配事を置かず、清らかな心で人と接するということです。清らかな心とは、誠実な心で、社会の人が仏を学んだ人を見、彼らは一般の人と違うと思わせません。

我作仏時。十方衆生。聞我名号。発菩提心。修諸功德。奉行六波羅

密。堅固不退。復以善根迴向。願生我國。一心念我。晝夜不斷。臨  
壽終時。我與諸菩薩衆迎現其前。經須臾間。即生我剎。作阿惟越  
致菩薩。不得是願。不取正覺。(十九、聞名發心願。二十、臨終接引  
願。)

第十九願で最も重大なことは「發菩提心」です。觀無量壽仏經において  
菩提心には三心が含まれると言っています。一つ目は至誠心、誠心誠意  
の極まりです。これは菩提心の本体であり、必ず作用します。その作用は  
深心と回向發願心に用いられます。深心は自らのために、回向發願心は他  
人のために用いられます。馬鳴菩薩は大乗起信論において、菩提心を直  
心、深心、大悲心に分けています。觀經と言ひ方は異なるものの、意義は  
同じです。この三心は古来の祖師大徳で多くの解釈があり、ご参考いただ  
けますので、ここで多くは述べません。蕩益大師の弥陀要解で解釈してい

るのが最も簡潔です。蕩益大師は、真に極樂世界を求め願う心が即ち菩提心である、と言っています。これは確かに道理に適っています。往生伝から見ると、念仏を唱えて往生した者が多くいます。特に田舎の老婆で、立ったまま往生したり、座ったまま往生したりする人もいます。彼女たちは菩提心とは何かを知らずに一心に極樂世界を求めました。これこそが菩提心である、と蕩益大師は一言で言い表しました。心から求生を願い、そして功德を修めるのです。彼らの行為や処世は他の人とは異なります。発心の前は、心が自己の利益のために動かされますが、発心後は、衆生のために思い、己を忘れ、あらゆる方法を尽くしてこの法門を大衆に紹介します。

冷静に考えると、我々はこの世間に来て何をしていますのでしょうか。現在、人々はテレビ、映画、ダンス、新聞、雑誌、画作を読むことを愛し、これは全て六道輪廻であって我々に無関係であり、一切不要なもので

す。家族がテレビを見たがるなら、好きにさせればよいのです。彼らは環境に振り回されますが、あなたはこれを見ても如如不動です。「凡所有相、皆是虚妄」。外には相（形ある物）にとらわれず、心にも汚れが無く、定功を用いて個人が個人の努力をします。「六波羅密」は菩薩が修める六大綱領です。第一は布施であり、「布施」は「萬縁放下」で、心の中の一切の妄想、執著、分別、憂慮、煩惱、心掛かりの全てを解き放ちます。第二の「持戒」は「守法」で、師が教えた法を守り、殺盜淫妄に限らず、現在いるこの地の法律、風俗、習慣を守ること、我々の修学は何の阻害も受けなくなります。第三は「忍辱」で、何においても忍耐力があればこそ、理想や願望が達成される、というものです。第四は「精進」で、毎日進歩し、一門を深く学びます。確かに無量の法門を学ぶことを誓う、これは間違っていないが、その前に「煩惱無盡誓願断（無限の煩惱を絶ち切ることを誓う）」が必要です。そうでないと学んだことが全て邪知

と邪見になり、かえって悪事になります。祖師が言ったことは全く正しいのです。煩惱を断ち切る前は、一門を専修する必要があり、煩惱を断つことができたら、より広く学び、多く見聞してもよいです。

人は真面目に修学し、まだ有名ではない時は謙虚であるものの、有名になった後、傲慢となり、全てを軽視しがちです。多くを学びすぎたため、博学多聞で、学べば学ぶほど煩惱が重くなり、最終的に何も達成できず、往生への障礙となります。唯一、精進してこそ禅定に達することができます。禅定（第五）は中枢、慧は目的で、最後に般若智慧（第六）です。我々もこの標準に基づき、決して退いてはなりません。

日常の修行に、日夜途絶えること無く、一日間から七日間、一心に阿弥陀仏を念じます。「打仏七」の場合、七日七夜中断せずに念仏し、誰かと会っても挨拶しません。仏七道場で厳守すべき規則は、普段は話すものの仏七中は念仏を妨げないために話してはいけない、というものです。現

在、仏七は法会となり、すでにその本来の趣旨を失っています。

一日一夜念じることには容易にできます。二十四時間、一句の仏号に専念すれば、効果は通常の念仏より多大了。「一心念我、昼夜不断、臨寿終時、我與諸菩薩衆迎現其前、經須臾間、即生我刹、作阿惟越致菩薩」。この句は非常に重要です。前文で十方の人々の往生を取り上げていますが、誰が仏に導かれ、誰が導かれないのか、条件を求めません。言い換えると、全ての人々は臨終時、仏により導かれます我々は四十八願を基本的な根拠とすべきです。「阿惟越致」はサンスクリット語で、即ち「引き返さない」という意味です。極楽世界に生まれたら三不退が証得され、円教の八地菩薩に等しく、これが弥陀本願的の加持です。

我作仏時。十方衆生。聞我名号。繫念我国。発菩提心。堅固不退。  
植衆徳本。至心廻向。欲生極樂。無不遂者。若有宿惡。聞我名字。

即自悔過。為道作善。便持經戒。願生我刹。命終不復更三惡道。即生我國。若不爾者。不取正覺。(二十一、悔過得生願。)

凡夫でも平時、教えに基づいて修行し、功德を積み、菩提心を発し、名号を執持し、極樂に生まれたいと願うなら、必ず往生できます。または自己の罪を懺悔して極樂へ往生できたケースもありました。その品位が高いか低いかわ、その懺悔の心の程度によります。觀經において、阿闍世王は五逆罪を犯し、臨終時、懺悔し、念仏を唱えて往生します。お釈迦さまは彼の往生の品位は上品中生と言っています。

「聞我名号、繫念我國」は、「聞く」には必ず信じることに理解することを含み、「繫念」において必ず願うことと実行することを含みます。この三つの条件が揃えば、極樂世界への往生の決心は非常に強固なものとなります。

「植衆徳本」とは本宗（浄土宗）の言葉で、執持名号のことです。一句の名号で、功德は不可思議です。「至心廻向、欲生極樂、無不遂者」とは、一生をかけて念仏の奥義を理解し、実行し、修行した者の願望は唯一、将来、極樂世界に生まれることで、必ず願いは叶うということです。過去の全ての悪業は懺悔されるべきであり、阿弥陀仏を念じることこそ懺悔であり、心の中に阿弥陀仏がいれば、悪念は消失します。また、阿陀十方諸仏威神の加持を得ることができます。

古来、多くの祖師大徳が仏教を学びはじめた頃、すぐこの法門を勉強したわけではありません。蓮池、藕益、近代印光大師も皆、各種宗派に精通し、最後この法門に接し、すぐに信じるようになりました。私は仏教を学んだ五年目、浄土法門に触れましたが、信じませんでした。私は李老師に師事して十年間、彼は印光大師の学生であり、浄土宗を広めておられました。私は李老師の教え方を受け入れ、尊敬しており、排除しないもの



の、信じていませんでした。しかし華嚴經について半分くらい講話したところ、華嚴の菩薩たちは皆念仏して浄土へ求生していたと気がつきました。文殊、普賢は華嚴世界の等覚菩薩であり、やはり浄土へ求生を願っています。經典は、十地菩薩は終始念仏を唱えていた、と言っています。

「始」は初地、「終」は等覚で、計十一階位の菩薩で、彼らは皆、念仏を唱えて浄土へ求生しています。この事実を知った後、この法門は諸仏が衆生を生死輪廻から救出し、仏道となる第一の法門であると信じるようになりました。これに気づいた後は、他の経教を全て見送っています。

信仰心を構築するには二つの方法があります。一つ目は真に認識し、明白に理解し、信仰心を揺るぎないものとする方法です。もう一つは、老婆方式の信仰です。理解できなくても、その善根は深く、念仏を教えたら、必死で念仏を唱え、一生変わらず、往生を決意し、我々は彼女たちに及びません。

台北蓮友念仏団の李濟華老居士は、ある集会で、仲間に向かつて1時間半ほど話しました。声は明瞭で、話し終えた後、家に帰ると言いました。皆、八十何歳かで高齢であるため、家に戻って休息すると思っていました。そして舞台を降りると、ソファーに座り往生しました。ある人は、二、三ヶ月前に死を悟っており、日曜日古い友人とおしゃべりをし、別れをしていたようだった、と話しました。

第二次世界大戦後、香港の何東爵士夫人は何世礼將軍の母であり、家族は皆、クリスチャンでした。何夫人だけが仏教の信徒でした。息子と娘たちは非常に親孝行で、家中には仏堂もあり、互いに衝突することはありませんでした。

彼女の往生は、香港人に大きな啓示を与えました。往生の日、子女、親族が一堂に集い、彼女は言いました。私たち一家の宗教信仰は自由です。しかし私は今日、極楽世界に行きます。子供たちよ、今日は私のため

に仏号を唱えて見送ってください。これが彼女の最後の要求です。情理として通るでしょう。彼女はあぐらをかくと、すぐに亡くなりました。この時から彼女の家族は全員仏を信じるようになりました。彼女は平時何も言わず、臨終時、皆に示し、結果、家族を信じさせました。世間は嘘に溢れています。これは本当の話です。

「為道作善、便持経戒」。善悪の標準を知りたければ、仏の教誨こそが標準です。戒律も善悪の標準です。しかし、総原則があります。即ち、「諸悪莫作、衆善奉行」です。更に一步進むと、自己に有利なのは悪であり、衆生に有利なのは善です。世間と仏の観念は異なります。仏は覚者で、衆生は迷っています。六道輪廻は自己中心の念頭から生まれます。我がある限り、輪廻し、三界六道があります。仏法の修学は終始、執着を打破するためであります。自己執着を打破したら、即ち、羅漢を証得し、三界を超越できるのです。自分のために念じ、自我を増長させ、また法に対

して執着する者にも見性はできません。これが真実です。禪に参加し、一ヶ月も座りっぱなしで出定せず、自我に執拗して打破できない場合、将来色界無色界天へ行くことは可能ですが、三界からはまだ出られません。念仏により、生死を終わらせ、輪廻から出、極楽世界に生まれることができます。但し、「我」の觀念は薄いほうが良く、将来、極楽世界で品位が高くなります。よって、通常の生活で、他の人を思い、社会を思い、自己を考えないことです。毎日、經典を読み、仏の教誨を受け入れ、仏の教訓を我々の思想、見解、生活行為とする、いわゆる「学仏」を行うことで、命の終わりに三悪道に陥ることは決してありません。

我作佛時。國無婦女。若有女人。聞我名字。得清淨信。發菩提心。厭患女身。願生我國。命終即化男子。來我剎土。十方世界諸衆生類。生我國者。皆於七寶池蓮華中化生。若不爾者。不取正覺。

(二十二、國無女人願。二十三、厭女轉男願。二十四、蓮花化生願。)

阿弥陀仏が菩薩道を行う時、この世の様々な男女の入り乱れ、絡み合いを見てきました。そのため女性のいない世を作り、全ての女性が極楽世界に生まれたら、一律男性へと変わるものとなりました。容貌の美しさが異なれば差別となりますが、極楽世界は平等であるため、容貌は完全に同じになります。唐朝の道宣法師は、かつて女性のいる世界には必ず地獄がある、と説いており、經典の中にもこの一説があります。かつての女性は苦難が多く、中国、インドでは全てこのようでした。現代社会は開放的で、男女は平等となり、仏教を学んで成就する者には、女性が高く評価されています。十方諸仏の刹土における衆生は、全て胎、卵、湿、化という形で生まれています。胎生において父母、兄弟、夫婦それぞれの情があつて、まるで縄で縛られるように断ち切るのが非常に難しいです。極楽

世界では、蓮花化生なので、このような牽連はありません。

我作佛時。十方衆生。聞我名字。歡喜信樂。禮拜歸命。以清淨心。修菩薩行。諸天世人。莫不致敬。若聞我名。壽終之後。生尊貴家。諸根無缺。常修殊勝梵行。若不爾者。不取正覺。(二十五、天人禮敬願。二十六、聞名得福願。二十七、修殊勝行願。)

仏が説いた一切の法門は全て対機説法です。この經典は機縁が成熟した人に対して説くものであり、成仏を求めないのであれば、この願も人天の果報を得ることができません。読経念仏の方法により世における人天の果報を求めると、一番重要なのは「歡喜信受、禮拜歸命」であり、真劍にその通りにします。善のことならを行い、悪のことならを止めるということ。清淨心で六度を修行すると、処世や人、物事への接し方が、この六か条を標準とすれば、他人はあなたに自然と恭敬心が芽生えたことを見て

取り、大衆の尊敬が得られます。そして来世には富裕の家に生まれ、五体満足です。善根が厚いことにより、来世はまた仏法に巡り会うことができます。でしよう。

我作佛時。國中無不善名。所有衆生。生我國者。皆同一心。住於定聚。永離熱惱。心得清涼。所受快樂。猶如漏盡比丘。若起想念。貪計身者。不取正覺。(二十八、國無不善願。二十九、住正定聚願。三十、樂如漏盡願。三十一、不貪計身願。)

極樂世界には三悪道はありませんが、阿弥陀經において極樂世界には白鶴、孔雀等の鳥がいる、と説いています。これは畜生ではないのでしうか？実はこれらは阿弥陀仏が変化したものであり、説法を行い、皆にいつでも、どこでも説法を聞かせるためです。仏は衆生を三つに分けています。一つ目は「正定聚」と言い、彼が修得する法門は必ず正確であり、

結果を残すことから、いわゆる正しい定聚といわれる所以です。二つ目は「邪定聚」と言い、どのような法門を修行しようとも、その理論、方法、境界について、どんなに精進し努力したとしても、全て結果を出せません。三つ目は「不定聚」と言い、縁により、本当に善知識に出会えた場合は正しい道へと進むことができ、邪門、外道に出会った場合はあなたを「邪定聚」へ連れていきます。そのため、善知識は非常に重要なのですが、現在とはとも見つかりにくくなっており、昔と比べることはできません。昔の修行者は明心見性後、全てのことがかかるようになったら、山に入って茅屋の中に閉じこもり、修行が成功したことを外に向けて宣言すると同様であり、山を下りて弘法する頼みを待ちますというものでした。現在には出家していなくても閉居をするなど、既に基準はありません。現在唯一の方法は、古人に学んで、古徳の私淑弟子になることです。例えば、孟子は孔子を敬慕していたので、同じ時代でなくとも、孟子は孔子の著作を



基に、これを師とすることで学問を成就させました。後世は孔子のことを敬って「至聖」と言い、孟子のことを敬って「亜聖」と言いました。その他にも例は沢山あり、例えば、漢の時代の司馬遷は「史記」の作者ですが、「左伝」を著作した左丘明に学びました。また、唐の時代の韓は司馬遷に学びました。今は学びたくても老師が見つからないため、古人に学ぶしかありません。仏門の中で蕩益大師は蓮池を敬服しており、学びがよく似ており、同じように祖師となりました。私は本日皆様に大善知識－阿弥陀仏を紹介します。無量寿経に基づき修学し、この經典の理論を理解し、教訓を生活の中で実現できるようにすれば、あなたは阿弥陀仏の第一弟子です。

極楽世界に往生できた人々の喜びは一切の悩みを断ち切った比丘と同然であり、これが阿羅漢です。「漏盡」は全ての煩惱を断ち切ったということです。悩みには見思、塵沙、無明という三つの種類があります。この

経は大乗經典であり、大乗な教義により理解しなければなりません。小乗は見思を断じるのみですが、大乗における漏盡とは十地の菩薩であり、法雲地菩薩は見思、塵沙を断じており、四十一品の無明のうち、三十九品を断じ、残りの二品は断じていません。これは大乗における羅漢であり、身見は破られ、二度と己の念に執着することはありません。仏は何故またこのような話を説くのでしょうか？ それは私たちが「帶業往生」（業を携えて往生すること）だからであり、身見を断じていなくても、いつでも己を思うが、極樂世界に辿り着いたとき、阿弥陀仏の本願功德の加持により、己を思う念は二度と起こりません。

我作佛時。生我國者。善根無量。皆得金剛那羅延身。堅固之力。身頂皆有光明照耀。成就一切智慧。獲得無邊辯才。善談諸法秘要。說經行道。語如鐘聲。若不爾者。不取正覺。（三十二、那羅延身願。

三十三、光明慧辯願。三十四、善談法要願。）

極樂世界に至れば、身体は力強くなり、壊れることのない金剛の身となります。「那羅延（ならえん）」は非常に力の強い神の名で、頑丈であることの比喻です。頭上に光があり、その光は清浄心により発せられています。現代の社会においては神通力を持っている人が大変多く、光を見ることができる者がいたり、地上から三尺離れることができる者もいたりします。しかし、彼らのこの能力は彼ら自身のものではありません。確かに能力はあるのですが、これは妖怪と鬼が彼らに与えたものであり、彼らは妖怪たちに操られているのです。

「善談諸法秘要」は説経と説法のことを指します。現在經典を説く人が少ないので、自身の無知により学ばないということがないように、私は各位に発心を起こして経を説くように勧めています。真に発心する場合、仏恩

に報いるために弘法利生（仏の教えを世間に広め、衆生に利益を与えること）を行い、名聞利養を囚らず、経を説くときは自然に仏、菩薩の加持が得られます。時には檀上で話しながら經典の奥義を存分に發揮し、話し尽した後は何を話したかとも思い出せないということがあります。またある時は講演の資料を準備したものの、いざ開講したときは資料が全て使えないなど、各位は将来説経に関わることになったとき、このような状況に出くわすことがあります。

我作佛時。所有眾生。生我國者。究竟必至一生補處。除其本願為衆生故。被弘誓鎧。教化一切有情。皆發信心。修菩提行。行普賢道。雖生他方世界。永離惡趣。或樂說法。或樂聽法。或現神足。隨意修習。無不圓滿。若不爾者。不取正覺。（三十五、一生補處願。三十六、教化隨意願。）

「一生補処の願」はとても重要です。私たちが極樂浄土で必ず一生成仏することを仏が保証するものです。「一生補処」は等覺の菩薩階位であり、円教の一生補処は觀音勢至等です。例えば、私が極樂世界へ行ったら、どのくらいで自分の家族を救うためにこの世に戻って来ることができるとでしょうか？極樂世界に辿り着いて阿弥陀仏に会った途端、仏力の加持を得ることで、直ちに娑婆の世界に戻ることができません。一切の有情を教化し、思うままに往来でき、一度と隔陰の迷いがあることはありません。七地の菩薩にはなおも隔陰の迷いがありますが、極樂世界に生まれると、このように殊勝の功力を得ることができ、十方の世界において衆生を教化し、仏法に対して信心が生まれるように発起させます。衆生が既に仏教を認識している場合は、菩提行を修めさせ、最高の段階として普賢の道に進んでもらいます。

全ての一乘了義の經典は普賢の道に属し、最高の仏道です。悪道から永

遠に離れることとなりますが、悪道に行かないのではなく、願い通り化身して行くのです。この目的は悪道の衆生を教化し、業の報いではありません。地獄の衆生は地獄で苦しみを受けますが、地藏菩薩は地獄において一切の苦樂を受けません。苦樂の事実がありますが、彼の心は定まっているので何も感じません。環境によって心境が変わるのは凡人です。その迷いのために事実の真相を完全に理解していないので、苦難を受けてしまいます。極樂世界の人の心は全て清浄であり、しかもこの清浄は失われず、阿彌陀仏の助けにより、どのような悪道の中でもその影響を受けません。説法したり、聞法したり、影響衆の役割を担ったりします。文殊、普賢、舍利弗、目犍連は全て古仏の再来で、お釈迦さまを助けて衆生を教化します。彼らは、例えば劇を演じるとき舞台の役者と裏方が違うように、裏へ行けば、老師が学生に変わることがあるかもしれませぬ。そのため仏法は常に因縁を説き、「一仏出世、千仏擁護」（一人の仏が世に出れば、千の

仏が擁護する」ということなのです。「神足」は「神通」であり、仏は神通をあまり用いずに衆生を引接しますが、妖怪や悪魔にも神通があり、衆生には見分けづらいために、仏は神通の使用を禁止しました。しかし、大きい影響力がある人に出会ったとき、例えば国王や大臣など、稀に神通を用います。但し、主に説法を行います。

我作佛時。生我國者。所須飲食。衣服。種種供具。隨意即至。無不滿願。十方諸佛。應念受其供養。若不爾者。不取正覺。(三十七、衣食自至願。三十八、應念受供願。)

この願は、私たちにとっても非常に重要です。私たちは六道の中で長い間頑固な習慣に染まり、衣食住について一日中これを気にかけています。阿弥陀仏は私たちに、深く考えすぎる必要は無いことを教えて下さり、極楽世界では服や食は思えば現れて来ます。現在のようになんか科学が発達

してもまだこんなことができません。エネルギーと物質が互に変化する  
ことは、今日の科学者たちによつて既に結論づけられています。どのよ  
うに変えるかはまだ分かっていません。何かを食べたいと思うと、次の瞬  
間にはもう食べ物が見え、食べ終わったら何も無くなり、お椀やお箸も洗わ  
なくてよいのは、どんなに気分が良いことでしょう。洋服も同じく気の向  
くままに、タンスも要らず、ショッピングも必要ありません。全ての享受  
する物は、思うがままに得られ、気に掛けることはありません。修福にお  
ける供仏（仏を供養する）は最も殊勝であり、現在仏はおろか、羅漢すら  
供養したくても見つかりません。極楽世界に居れば、十方三世すべての仏  
に供養するには、念じることですぐにできるのです。どのような供養具を  
用いるのも思いのままです。これらの知恵、能力、神足は全て円満の境地  
に達します。経によると、八地以上の菩薩のみ得ることができるとあり  
ますが、この経はただ「我が国に生まれた者」ならできると言っていま



す。「上品上生」とは言わず、「下下品」もこのようであることが分かります。私たちは阿弥陀仏を唱えるだけで八地菩薩の地位に達することができるため、多くの菩薩は信じません。この方法は簡単に行えるために信じ難いのですが、信じる者は、過去生における善根福德の因縁をもってこれに到達できます。

我作佛時。國中萬物。嚴淨。光麗。形色殊特。窮微極妙。無能稱量。其諸眾生。雖具天眼。有能辨其形色。光相。名數。及總宣說者。不取正覺。(三十九、莊嚴無盡願。)

この願文は、極楽世界の物質環境について紹介しており、概要のみを説いています。「万物」は全ての物質のことです。「嚴」は莊嚴、「淨」は清淨のことです。現在、世界における環境汚染は非常に深刻であるため、「莊嚴、清淨」の四文字を見ると、昔の人より深刻さを感じます。

「光」は光明、「麗」は華麗のことで、極樂世界の善美を表していません。形や色は殊勝であり、奥深くとても巧妙で、称量することはできません。これは阿弥陀仏の無量劫における修学の功德を成就したものであり、十方世界から極樂世界に往生する人の淨業の所感であります。極樂世界の光景は、さまざまな大菩薩が天眼を具えているが、等覺の菩薩も、その形、色、光相、名数を区別し、円満に表現することはできません。それは極樂世界が如来果地における成就であり、仏のみが究竟することができるところからです。

仏教を学ぶにあたり最も重要なことは、事実の真相をきちんと認識することです。しっかりと認識した後、自身で選択、決断することができず。私たちはこの娑婆の世界で生まれ、全ての事物がはつきりわかると、次第に嫌な気持ちが生まれ、どこか別の所へ行きたくなくなります。どこに行くのでしょうか？世間では果報が大きく地位が高くて富豪の人は、金持

ちであればあるほど作る業も重くなり、将来はどの道に転生するのか、業力に引きつられ、自分では決めることができません。凡夫は昼間に思ったことが夜夢に出てくると言われ、夢の中ではこの人の善悪の境界を試すことができません。心の中で想像したことが夜夢に出てくるのは、思想とは業力であり、業力は確かにあるということです。業力を変えたい場合、唯一の方法は、願力により業力を降伏させることです。今日幸いにも仏門の中で一本の生きる道を見つけ、善知識は私たちを勧告するだけで無く、あらゆる仏、菩薩も念仏法門を異口同音に称賛します。特に末法の時期は、この他に進める第二の道はありません。法門が無量にあるということは、理論上の説であり、実際はそうではありません。小乗の初果の位から言えば、まるで小学一年生のように地位はとても低くても、三界八十八使の見惑を断つことが必要です。見惑は大きく身見、邊見、見取見、戒禁取見、邪見の五つに分けることができ、合わせて八十八使となります。これ

らの煩惱を断ち切れれば初めて小乗の初果である須陀洹を證得することができますが、三界からはまだ出られません。更に天上界と人間界を七回往来し、阿羅漢果を證得して始めて三界を超えるので、簡単なことではありません。はつきりわからない場合は、間違つた決定をしてしまい、自身の一生を誤導してしまいます。

我作佛時。國中無量色樹。高或百千由旬。道場樹高。四百萬里。諸菩薩中。雖有善根劣者。亦能了知。欲見諸佛淨國莊嚴。悉於寶樹間見。猶如明鏡。睹其面像。若不爾者。不取正覺。(四十、無量色樹願。四十一、樹現佛剎願。)

極樂世界の樹木は誰にも愛され、品種もとても多く、大きさは非常に高いもので、百千由旬にも達します。「由旬」はインドにおける長さの単位であり、大、中、小の三種類に分けられます。大由旬は中国の八十里、中

由旬は六十里、小由旬は四十里となります。先に話した由旬は大由旬のことと言います。道場樹は、阿弥陀仏の講堂の周りにある大きな樹で、高さは四百万里もあります。これは信じられないほど大きな樹です。極樂世界の人の身体が無類の大きさであることも知っておかなければなりません。讚佛偈の中では阿弥陀仏の身相を「白毫宛轉五須弥，紺目澄清四大海」（白毫が宛轉して五須弥山のようにあり、目が澄み切った四大海のように）と稱賛しています。仏の眉間には二本の白毛が旋回してまつまり、丸い玉のような形は、まるで非常に高い五つの須弥山があるようです。仏の目は太平洋より大きく、このような所以から、極樂世界の人と樹の大きさの比例は筋が通っています。経の中では最もよく見る樹を例に出して言い表していますが、「菩薩の中には、善根の劣る者でも分かることができるとあり、一般の凡聖同居土である下下品の往生者も、樹に対して理解があります。しかし、その他の物について説く場合は、善根の劣る菩薩は

恐らく知ることができません。極樂世界に往生する全ての人は、その身量が阿弥陀仏と同じです。

極樂世界の人、事の環境と物質の環境は、全て阿弥陀仏の称性功德が流露したものです。樹の功德はとても不思議なもので、樹でも弘法と教学ができ、その機能はテレビ画面のようです。私たちが十方世界の状況を見たい場合は、宝樹の間からこれを見ることができ、思いのまま、鏡のように、画像を目にすることができます。

私たちは前世が存在することを認識しなければならず、そうでなければ、今生で受ける果報について話が通りません。世間の全ての人が受ける果報は異なり、自業自得によるものです。この事実を分かれば、決して上手くないかないことを全て他のせいにしてはならず、いかなる結果を心穏やかに受けとめなければならぬということなのです。因果応報の道理を知り、極樂世界の因縁をよく修行し、全ての精神を投げ入れれば、来世は果

報を受けることができます。この世での生活は業力の支配を受け、善い事を行いたくても魔障がありますが、極楽世界に生まれれば、仏の威神や加持を承け、いかなる魔障も現れません。

我作佛時。所居佛刹。廣博嚴淨。光瑩如鏡。徹照十方無量無數。不可思議。諸佛世界。衆生覩者。生希有心。若不爾者。不取正覺。

(四十二、徹照十方願。)

阿弥陀仏が彼自身の居住環境について説いていますが、つまり極楽世界に生まれた後は、私たちの正報、身体や容貌及び生活環境は阿弥陀仏と同じであることを教えて下さったのです。極楽世界は平等の世界であり、居住する環境は大変広く、莊嚴で清淨です。「光瑩如鏡」とありますが、

「光」は光明、「瑩」は清淨のことで、一塵不染(塵にも染まらない)物欲に迷わないことの意)です。人の身体又は一切の万物は全て透明で、七

宝も透明です。娑婆の世界は水晶のみが透明ですが、極楽世界は地面さえも全て透明です。十方の無量の諸仏世界を照らし、現在、過去、未来の事も全て見ることができません。心の中で何を思っても、全て見透かすことができません。無量劫における因縁果報は、自身或いはあらゆる菩薩にかかわらず、全て徹底して明確に理解できます。なぜ仏又は菩薩になるのか、なぜ三悪道に堕ちるのか、一目瞭然なのです。

我作佛時。下從地際。上至虛空。宮殿。樓觀。池流。華樹。國土所有一切萬物。皆以無量寶香合成。其香普熏十方世界。眾生聞者。皆修佛行。若不爾者。不取正覺。(四十三、寶香普熏願。)

楞嚴經の「大勢至円通章文句」において、かつて「香光莊嚴」という言葉を読んだことがあり、現在はこの地で香光莊嚴の真相を見ることができません。前二品は光明を説いており、本品は宝香を説いています。この世界



の七宝は光彩のみで無香ですが、極樂世界の七宝には香りがあります。そのため極樂世界は「香光莊嚴」と呼ばれています。仏法の初学者は宝香を最も感応しやすく、心が清浄で誠があり、念仏の時でも、誦経の時でも、時に香りを嗅ぐことができます。三ヶ月前、ダラスの陳大川居士家において、ある日同修五、六人が院の中で納涼しながら仏法について討論していたとき、同修たちは同時に時間長く異香を嗅いだということがありました。仏の光明は周遍法界であり、宝香も周遍法界であることが実証されました。十方世界の衆生は縁があつて仏光を見たり、宝香を嗅いだりすれば、皆仏法を学ぶ発心となります。この経文は、極樂世界の境界と華嚴経で説く「理事無礙法界（事象と真理が障害無く関わり合い融合する世界）、事事無礙法界（あらゆる事象と事象が障害無く自在に関わり合い調和する世界）」は完全に同じことを表しています。衆生は仏光や宝香に触れることで仏との縁が深くなり、これらの瑞祥の感応は衆生の信心を発奮

させることができます。このような感応があることで、仏法に対して信仰が生まれます。以後の修学が成就できるかどうかは、どんな機縁にめぐり合うかによるもので、念仏法門に出会えるのであれば、容易に成就することができます。

四十八願の中で前四十三願は全て仏が発する「普度衆生、往生浄土」の願で、四十四から四十八願は仏が発する別願であり、菩薩たちに対して発しているものです。菩薩は全て己を捨てて衆生のために奉仕しますが、七地以下の菩薩は、六道の中で衆生を济度するものの、隔陰の迷いがあります。人間に転生すると前世のことを忘れ去ってしまうのです。これらの菩薩が浄土法門を修行し、阿弥陀仏の威神加持があれば、隔陰の迷いはありません。そのため、大菩薩はいつも小菩薩を気にかけており、往々にして必要な時に目覚ませ、小菩薩はすぐに覚醒するのです。

我作佛時。十方佛刹。諸菩薩眾。聞我名已。皆悉逮得清淨。解脫。普等三昧。諸深總持。住三摩地。至於成佛。定中常供無量無邊一切諸佛。不失定意。若不爾者。不取正覺。(四十四、普等三昧願。四十五、定中供佛願。)

ここで言う「諸菩薩衆」は円教を説いており、初信の位から等覺まで、五十一の階位が全て中に入っています。彼らは阿弥陀仏の名号を聞き、「皆悉逮得清淨、解脫、普等三昧(皆悉く清淨、解脫、普等三昧を逮得します)」。菩薩が多生曠劫にわたって衆生を教化する願を發しており、自覺、覺他の面において殊勝な功德があり、この法門を聞き、得られた利益は凡夫を超え大変多いものです。彼らは「清淨、解脫」を得ており、す。「清淨」ならば一切の汚れから離れるが、汚れた程度がまちまちです。「解脫」すれば、一切の煩惱から離れる。気にかけるだけで煩惱はあ

り、自在できません。「普等三昧」の「普」は普遍、「等」は平等のこと  
で、普遍平等は如来果地における証得するものです。本宗から言えば、  
「普等三昧」は念仏三昧において最も高く最も深いものです。「諸深総  
持」は、簡単に言うと、一切の善法を失くさず、一切の悪念を生まないと  
いうことです。念仏三昧の中で成仏するまで安住します。菩薩は極樂世界  
に辿り着いていなくても、阿弥陀仏の名号を聞き、無量寿経を読み、阿  
弥陀仏の加持を得ることができます。但し菩薩は必ず阿弥陀仏に対し敬  
慕、恭敬の心を生まなければなりません。経法や名号に対して排斥や誹謗  
をした場合は、加持を得られないだけでなく、甚深な罪過があります。

「定中常供無量無辺一切諸仏、不失定意」は、定中では本所を離れる必  
要は無く、一念を起せば全ての仏を供養することができます。最も得難  
いのは彼が依然として定意を失っていないことです。私たちは道場にて  
一人で修行をすると、心がとても清浄となり、一旦善知識を参訪すると

「定」は無くなります。私たちは普段念仏するとき、なぜ阿弥陀仏に会えないのでしょうか。これは会えない方が良いのかもしれない。もし会えたら大変驚き、かえって心が動揺してしまい、ひいては傲慢な心が芽生え、他の修行者を見下してしまうかもしれません。たとえ将来仏又は極樂世界が見えても、祖師たちと同じように重要視したりせず、一切の境界において執着しないことです。例えば惠遠大師は当時三回極樂世界を見ましたが、誰にも教えたことは無く、最後の臨終のときに徒衆に教えましたが、同様に一切の魔境の前でも、憎しみを生まず、定意を失わず、影響を受けずに、依然として聖号を唱えることです。順逆の境界の前では私たちの心は清浄なのです。

我做佛時。他方世界諸菩薩衆。聞我名者。證離生法。獲陀羅尼。  
清淨歡喜。得平等住。修菩薩行。具足德本。應時不獲一二三忍。

於諸佛法。不能現證不退轉者。不取正覺。(四十六、獲陀羅尼願。四十七、聞名得忍願。四十八、現證不退願。)

「証離生法」の「生」の字は、「六道輪廻」のことを言い、「離生法」は三界六道からの永遠の離脱を言います。菩薩は三界六道で示現しますが、仏の加持を得られない場合は、依然として隔陰の迷いがあり、生死も依然として繰り返します。梵語の「陀羅尼(ダラニ)」は、意識して「総持」とも言い、一切の法を総じ、一切の義を持ち、一切の法の総綱領でもあります。陀羅尼は、法、義、呪、忍の四種類あります。法は教学のことで、仏の教法を受持し、決して忘れません。義は理論のことで、あらゆる法の義を受持し、忘れることはありません。呪文は神聖な呪文のことです。忍は法の実相に安住することです。綱領を掴んでいけば、衆生を教化するには間違いは無く、一切の障害はありません。

「清淨歡喜、得平等住」とありますが、平等は非常に重要です。一切の方法では、体（自性）は平等で、相も平等です。私たちが見た方法は平等ではありません。私たちは相に着かれていますからであり、假相（偽りの姿）に惑わされます。例えば一般的な家でいえば、あるものは綺麗で、あるものは普通だと、違って見えます。しかし、もし建築師に見てもらえば、彼はこれらの家にどのくらいの瓦、コンクリート、木材が使用されているのかを見るだけで、家は全て平等に見えます。菩薩は真相を見て方法の平等を理解するので、区別したり、執着したりせず、真に清淨で平等です。この時、必ず「三忍」を証得しなければならず、「三忍」とは「音響忍、柔順忍、無生法忍」のことを言います。仁王経においても、忍を用いて菩薩の果証を説明しており、五つに分けられています。「一、伏忍」。執着と妄想を伏せることができますが断ち切ることは無く、これは帶業往生の基本条件です。外観は隨順、内心は清淨平等であり、外界に動

揺させられることはありません。あらゆる仏菩薩の喜怒哀楽は教学ですが、表情はただ演じているようなものです。「二、信忍」。信心の成就は、深く信じ疑わないことであり、前述より一層深く煩惱を伏せます。

「三、順忍」。これは前述した柔順忍のことです。仁王經の五忍と本經の三忍を合わせれば、おおよそ理解することができ、全て円教における地上菩薩の境界を言います。

「於諸仏法不能現証不退轉者」とありますが、現前の果証は円満に「三不退」（位不退、行不退、念不退）を証得したということです。この阿弥陀仏の最後の願は、十方菩薩を助けて発したものであり、極楽世界に辿り着く必要は無く、阿弥陀仏に対し称名、称賛、恭敬、供養、教義に依拠した修行を行い、人のために仏法を説けば、必ず阿弥陀仏の最後の願による加持を得ることができるといふことです。



# 十念法

淨空法師が宣説する簡潔な必生十念法を、淨土宗を学ぶ人に一般的な自修及び共修の方法として提案します。以下の通り説明します。

自修者は、十声の仏号を毎日九回唱えます。朝起きた時及び寝る前に各一回、三食時に各一回、午前中の始業時及び終業時に各一回、午後の始業時及び終業時に各一回の計九回行います。毎回の称念は、四字（阿弥陀仏）又は六字（南無阿弥陀仏）の名号を十声唱えるものとし、現有の日課は支障無く通常通り行えます。

共修者は、説経、会議、会食等の特定な儀軌の無い集会を行う際、共同行事の始めに、この十念法を行います。大衆は皆合掌し、一斉に「南無阿弥陀仏」を十声称念し、その後説経、会議、会食等の活動を始めます。

この自修及び共修の十念法は、以下のような特殊な法益があります。この念仏法は簡単で行いやすく、時間を僅かしか取らないが効果は大きく、確實且つ切要で、長く広く行えます。これは家族に仏教の教化を受けさせるための具体的で有効な方法となります。

例えば、家庭内の三食時にこれを行えば、家族皆信じる、信じないにかかわらず、仏の加持を得られます。この方法により親戚や近隣に仏教の教化を受けさせ、仏教の社会普及に大きなご利益があります。

簡単に行えるため、この念仏法を一日九回行い、朝から晩まで念仏の心は断たれることがありません。一日の生活において仏念が持続し、来る日も来る日も続き、長くこのように行えば、気質と心性が徐々に清浄となり、信心と法樂が生まれ、福が限り無く大きくなります。

心を穏やかにし、十声の仏号を唱えれば、雑染を払いのけ、心を清め、心神を集中し、修道に専念することができます。また、願望が達成しやす

く、吉なことに出会い、仏の加護を受け、不可思議な功德等を被ることができます。

自修及び共修は、互いに促進し、融合します。実行することにより、個人の往生を確実なものにし、共に如来家業を成し遂げることもできます。

この念仏法には二つの名を付けることができます。

一つ目は「淨業加行十念法」と言い、既に日課を行っている者を対象とし、この念仏法を現有の日課に加えて行います。

二つ目は「簡要必生十念法」と言い、現在の社会は変化し、多忙で暇が無く、支障が多いため、日課が定まらない者に適しています。この念仏法は信願を持って行い、有効で、実践しやすい円満な方法です。また、「都摂六根、淨念相繼（六根（眼、耳、鼻、舌、身、意、六つの感官）を摂めて淨念（念仏の念）を継続させる）」の基準に合っており、欠けるも

のがあります。

毎回の念仏において時間が短く、攝心しやすく、怠ることがないため、また、九回の念仏が均衡的に一日中に分けられるため、終日仏を思う心になるでしょう。つまり、念仏が生活の一部となることでしょう。

総じて言えば、この念仏法は簡潔で実行しやすく、苦無く続けられるのです。この念仏法を広めることができれば、それは浄業を学ぶ者の幸せであり、未来の衆生の幸せであろう！諸仏も喜びます。南無阿弥陀仏。

一九九四年諸仏歡喜日米浄宗学会四衆同倫



一、依法不依人

二、依了義不依不了義

三、依義不依語

四、依智不依識

五、以戒為師以苦為師

淨土時年八十有二



- 一、法に依りて人に依らざれ
- 二、了義に依りて不了義に依らざれ
- 三、義に依りて語に依らざれ
- 四、智に依りて識に依らざれ
- 五、戒律を師とし、苦を師とする

普為出資及讀誦受持  
輾轉流通者迴向偈曰

願以此功德  
消除宿現業  
增長諸福慧  
圓成勝善根  
所有刀兵劫  
及與饑饉等  
悉皆盡滅除  
人各習禮讓  
讀誦受持人  
輾轉流通者  
現眷咸安樂  
先亡獲超昇  
風雨常調順  
人民悉康寧  
法界諸含識  
同證無上道

\*\*\*\*\*

公元二〇一五年四月 恭印貳仟冊

# 第六の大誓願

印贈者：香港佛陀教育協會

地址：香港九龍尖沙咀漢口道39-41號

麥仕維中心7和9字樓

電話：(852) 2314-7099

傳真：(852) 2314-1929

E-mail: [ambhk1@budaedu.org.hk](mailto:ambhk1@budaedu.org.hk)

Website: [www.ambhk.com](http://www.ambhk.com)

[www.amb.tw](http://www.amb.tw)

淨空法師 [www.amb.cn](http://www.amb.cn)

影音網址 [www.hwadzan.com](http://www.hwadzan.com)

[www.chinkung.org](http://www.chinkung.org)

承印者：世樺國際股份有限公司 (02) 22469928

\*\*\*\*\*

《著作權聲明》

本著作採用

台灣3.0版創用

CC「姓名標示

非商業性」

禁止改作」條

文，免費結緣

，禁止販售。

使用者按本會

之方式表彰來

源後，歡迎

翻印流通，散

布、傳輸；但

不得有任何商

業行為，亦不

得變更、轉變  
或修改內容。

<http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/3.0/tw/>



This book is for free distribution. It is not for sale.